
未散未生 散らず、生まれず

白駒の池

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未散未生 散らず、生まれず

【Nコード】

N3500T

【作者名】

白駒の池

【あらすじ】

生まれてくることすら許されなかった命と、散ることなど誰も望まなかった命。二つの魂が蘇り、父と母はそれぞれに思いをぶつけあう。

そうして、2人は幸せにぐらしましたとき。おしまい

「えゝ、もうおしまい？」

「そうよ、おしまい。もう寝なさい。」

「もう1個、よんで欲しかった。」

「また、明日ね。」

「…」

「早く寝ないと、怖い怖い童がやって来て、いたずらするわよ。」

「わかったあ。」

そう言うつと、みちるは、思いつきり布団を被った。パチンと音がして、母がみちるの部屋を出て行くと、みちるの部屋には闇が訪れて、そうして、うとうと始めたみちるの耳に今夜もあのわらべ歌のような歌詞が聞こえてきた。

みちるちゃん。みちるちゃん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とうちゃん、かあちゃん、寝たからさ。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

毬投げ、お手玉、おはじきに、めんこに、ビー玉、こま回し。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

その夜。いつもなら、目を開けると、それはもう朝日が差し込ん

で、暗闇はどこにも無かったのだけど、その日に限ってそこはまだ、真っ暗な世界だった。

一人で眠るには少し広すぎるその和室。父親が使っていたその部屋が、みちるのものになった。でも、まだ幼いみちるの眠るその寝具の脚元のその向こうには、広く畳が見えていて。そうして、その隅の隅の端つこに、一人の男の子が、こっちを向いて、

「みちるちゃん、遊ぼうよ」

そう言つて両方の手の平で、刺繍細工の施された小さな毬を持つて立っていた。

どうしてだろう。灯りのないその場所のはずなのに、黄色のぼんやりとした灯りがもっているようで、そこだけがみちるの目にははつきりと浮かんで見えた。

寒い寒い北風の晩なのに、その子ときたら、うすい一重の寝着を着て、おまけに膝から下はつんつるてん。上手に毬をついて、みちるに、

「遊ぼうよ。」

そう誘うのだ。

静かに寝入っていたはずの未散が、母親に掛けてもらつた布団をはいでその男の子のところに歩いてゆくと、その男の子は、持っていた毬をみちるの方へ、

「ほら。」

と言つて転がした。

みちるがそれを受け止めると、につこり笑つた。

「あなたはだあれ？」

「おら？おらは『みきお』」

「みきおちゃん？」

「どこから来たの？」

「すぐそこだよ。」

「みちると遊びに来たの？」

「そつだよ。みちるちゃん。あそぼ。」

「うん。あそぼう。」

そう言つて、2人はその闇の中で、ひとしきり遊んで、そうして、明け方明るくなる頃、みきおは、すうつとみちるの前から消えてしまった。まるで、煙のように。低く低く垂れこめた煙が、朝の光に打ち消されるように、すうつと消えてしまった。

「みきおちゃん？」

みちるがどんなに名を呼んでも、明るくなったその部屋に、みきおは帰つてこなかった。

朝になつて、母親がみちるを起こしにやってくると、みちるの部屋は、いつもよりひんやり冷たく、冷気が漂つていて、

「おや、この部屋は他の部屋より、ずいぶん冷えてしまったね。」

「みちる、朝よ。おはよう。」

母はそういうと、東側の窓のカーテンを開け、真冬の光が差し込んだ。みちるは少し目眩がして、開きかけた瞳を閉じたのだった。

「そうして、悪い鬼をやっつけて幸せに暮らしたとさ。おしまい」

「おやすみなさい。」

「あら、今夜はどうしたの？珍しいわね。お休みなさいだなんて。」

「だって、ママがいったんだよ。お話は1個つてさ。」

「そうね。お話は1個。」

「うん」

「おやすみ。」

母はそう言つとまたいつものように電気をぱちんと消して出て行った。暗い闇夜がやって来て、いつものようにみきおの歌が聞こえてきた。

みちるちゃん。みちるちゃん。

今夜はどうしてはよいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とうちゃん、かあちゃん、寝たからさ。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

毬投げ、お手玉、おはじきに、めんこに、ビー玉、こま回し。
ふたりでこれから遊ぼうよ。

いつものようにみきおが足元に立っていた。

「みちるちゃん。」

「みきおくん。」

2人はすっかり打ち解けて、にっこり笑って遊び始めた。

「ねえ、みきおくん。今度、お外であそぼうよ。」

「外？」

「そう、おひさまの下で、鬼ごっこしようよ。」

「……」

「だめなの？」

「……」

「おら、ここへは夜しか来れないんだよ。」

「夜？」

「そう。夜。」

「夜だけ？」

「そう、夜だけ。」

「……」

その夜は、みきおに「夜しか遊べないんだ」と言われて、とても悲しくなった。みちるには友達がいなかったのだ。体が弱くて生まれた頃から誰とも遊んでいない。窓の外、みちるが外を見降ろすと、近所の子供たちが、毎日毎日鬼ごっこをしている。その輪の中

に自分も入りたい。みちるはずっとずっとそれだけを望んできた。家の中から、窓を通してみんなの遊びを見るのではなくて、その輪の中に走ってゆきたい。皆と一緒に走っていたい。だが、みちるにはずっと叶わぬ夢だった。

そんなみちるのところにみきおがやってくるようになって、部屋の中ではあるけれど、遊べるようになった。うれしい。でも、みちるは外で遊びたい。そんな思いはやっぱり叶わなかった。

「あのね、みちるちゃん。」

「なに？」

「約束して欲しいんだけど。」

「約束？」

「そう、約束。」

「うん。どんな約束。」

「あのね、絶対に誰にも言ったらだめだよ。」

「？」

「ここに毎晩、おらが遊びに来ているってこと。絶対。言ったらだめ。」

あんまり怖い顔でみきおが言っただけ、って言うものだから、みちるはすっかりおじけづいて、本当は、ともだちができた。とみんなに言いたいのに、じつと我慢しなくてはならなかった。だって、みきおは、

『誰かに言ったら、もうここへは来られなくなってしまっただ。』と、言っただから。

やっとできた友達がいなくなってしまうたら……だから、みちるは言いたいのをじつと我慢した。

「みちるにもお友達ができたよ。」

心の中で何度も何度も呟いた。

「みちる、あなたも本当なら小学生なのよね。」

母はそう言いながら、そそくさと掃除を始めた。外の空気が冷たかったけど、母は、窓を全部開け放し、

「気持ちいいわね。」そういつて、はたきをかけはじめた。今日もまた近所の子供たちは、みちるの部屋の前を、ものすごい勢いで走っている。

「きゃー、待ってえ。」

「やだよ。」

「だめええ。」

みちるもその輪に入りたい。どの顔もとても楽しそうなのだ。

「おにいちゃんも、おねえちゃんもにぎやかね。嫌になっってしまう位だわ。」

「みちるはいやになんてならないよ。」

「ここから出ていけないのに、声ばかり聞かされて、嫌になるわよね。」

「だから、ならないってば。」

「さてと、晩御飯の買い物に行かなくちゃ。」

母はいつもそうだ。自分の思いだけをさっさと並べて、さっさと出てゆく。私の思いなど何もきいてくれない。ずっとずっと、私はここに置いていかれるばかりだ。この部屋はいつも眩しい。朝日がこぼれて、昼間は蘭を育てる温室のように暖かで、太陽の沈むその頃には、真っ赤な夕日を見る事が出来る。私は、この部屋にいて、時を知る。ここから出て行くことなしに季節を知るのだ。

みちるちゃん。みちるちゃん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とうちゃん、かあちゃん、寝たからさ。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

毬投げ、お手玉、おはじきに、めんこに、ビー玉、こま回し。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

漆黒の暗闇の中で、みきおの歌が聞こえてきた。

怖くなんてない。ワクワクする。もう何日、こうしてみきおと遊んだだろう。暗闇の中で何度、こうして寢床を抜け出しただろう。暗闇が楽しい。そう、怖くなんてない。楽しくて仕方が無いのだ。

「あなた、明日、朝早くに出かけてきますから。」

「んっ？」

「いやだわ。雑司ヶ谷ですよ。先月も、先々月も行かなくて。待ってますから、出かけてきます。」

「ああ、そうだったね。」

「男はすぐに忘れてしまうんですから、こまったもんですよ。」

「そんなことはないさ。」

「帰りに、いつもの甘い奴、買ってきますから。」

「ああ、わかった。」

「そうそう、みちる（、、（の（、（部屋（、、（ですけど…。」

寒いんですよ、少し。このところ、あんなに温かい日当りの好いはずの部屋が、朝のぞきに行くと、冷気が漂っている感じで。暖房つけましようか？ねえ、あなた、どう思います？」

返事がない。夫は寝がえりをうちながら、布団を引きあげ背を向けている。寝てしまったのだろうか。まだ、話は途中なのに。

妻は あれから というもの、必ず、みちる（、、（の（、（部屋（、、（という。一番日当りのいい、2階の和室に移してからというもの、みちる（、、（（の（、（部屋（、、（に毎日のように通い、夏には暑いからと簾をたらし、冬には寒いから、と火を入れる、という。何のために…。毎月のように雑司ヶ谷へと向かう。「待っているから」と言っ。そうして、私は、いつも見て見ぬふりをする。母性というのは、抱けぬわが子のためにでも、ここまで出来るものなのか。

「じゃあ、行ってきます」

妻は朝早くからそう言っ。家を留守にした。こんな日は、私が妻

の代わりにみちる（、（の（、（部屋（、（へと向かうのだ。幼いころ、自分が使っていたその部屋に。足取りはいつも重い。あんな事があってから、その部屋は私にとっては気が重い。

ふすまを開けると、そこはまだ暗闇だった。東側には腰高窓があり、南側には、全面開放できる大きな窓がある。そこを開けると、広い物干し場があるのだが、洗濯ものを干してしまつとみちる（、（の（、（部屋（、（に日が差さなくなるからと、妻はここにもう何年も洗濯ものを干す事をしていない。

「大丈夫さ。干したつて。みちるはそんなことで機嫌が悪くなつたりしないから。」

私がそう言つと、妻は聞こえなかつたふりをする。そして、庭先に自分で拵えた物干し場に洗濯ものを並べている。

「なあ、みちる。どうおもう？とうさんには、かあさんが理解できないんだよ。」

そう言つて、みちるのほうへと振り返つたのだが、みちるは、私にはけつして口を聞いてはくれない。妻は、毎日のように、今日はたくさんみちると話したというのだが、みちるは私を許さないのか、一度だつて話してはくれないのだ。西側の壁に写真を掛けた。3歳の七五三の時の笑顔がそこにある。その脇にちいさな漆塗りの仏壇があり、さらに小さな位牌があつた。

「なあ、みちる。とうさんはどうしたら、かあさんに許してもらえるのだろうな。教えてくれないか。」

心の中に封印したはずのあの日の事が、妻の出かけたみちる（、（の（、（部屋（、（で蘇つた。

あの日。2年前のみちるの七五三の日。みちるは妻の実家で逃えてくれた、緋色の綸子の被布を着ていた。その下には、白色の地に、金糸、銀糸で刺繍された振袖を着て、その着物姿は、とても可愛かつた。いや、「可愛かつた」などと言えば、妻は逆上するかもしれない。私はその姿をこの眼で見ることにはなかつたのだから。こうし

て、写真に残る、その無邪気な笑顔の写真でしか見た事が無いのだ。

私達夫婦には長い間子供が出来なかった。そして、ようやくみちるが生まれ、世間から見れば幸せに違いなかったのかもしれない。だが、実際には、子供に恵まれなかった何年かの間に、互いの気持ちには確実に、はつきりと離れていたように思う。

跡取りのために肌を合わせている事に、男の自分は行き場の無い悲しみを感じるようになったのだ。ゆきえの作る、温かだけど冷え切ったみそ汁よりも、一人きりで食べる、在り来たりな定食屋がおいしく感じられた。冷たくても一人で眠る布団の方が優しく眠れた。ゆきえと言えば、事あるごとに「子供はまだ？」と、聞かれることに閉口していたようだった。笑わなくなっていたのもこのころからだった。

同じころ、仕事先の宴会でちいさな小料理屋を訪れた私は、その店を切り盛りしていた智子と深い関係になった。愛していた、と言えば嘘になる。だが、しっかり者の妻と比べると、折れてすぐにでも朽ちてしまいそうなその女を、ほうっておけなかった。男の性だったと言えば、それは言い訳なのだろうか。そうして、ゆきえがみちるを妊娠した。

それでも、私は智子との関係を清算しなかった。それどころか、私は、わが子の七五三の時も、

「ちよつと出かける、祝いに出かけるまでには戻るから。」

そう言つて家を開けた。

昼ごろに神社に行くと言うので、それまでに戻るつもりだったのだ。前日、祝い事があるからと云つてあったのに、仕事場に電話をしてきて、「どうしても話したい事がある」と言つて智子は譲らなかつたからだ。

「休みの日に私が出入りしているようだ」と私と智子のが噂になり始め、妻はそのことに気が付いていたようだったが、私を責めたりはしなかつた。それがかえって私の心を苦しめたのだが、そ

れでも、気持ちが妻に戻る事はなかった。

だが、妻の父に呼び出され、私は、その女との事を問い詰められた。近所で耳にはさんだのだが、男の火遊びにいちいち口をはさむつもりはない。ないが、いったいどうなっているのか、と散々言われた。だから、少し離れることも考えて、店に出かけたのだった。

「しばらくは会わない方が……。」

私がそう言ったとたん、折れて朽ちてしまいそうだったその女は、店の掃除をしていたその手を止めて、はらりと一粒の涙をこぼしながら、

「残酷なひと。」

それだけ言って、ふっきるように言ったのだった。

「今日は帰ってくださいな。お祝い事なのでしょう。私は何も望んではいませんから。」

私は話し足りない気持ちを抑えて、

「また来るから。」

そう言って店を出た。

途中、妻から

「記念写真を撮りますから、髪を切って来てくださいね。」

そう言われていた事を思い出し、私は近所の床屋に寄った。あの時、私が床屋に寄りさえしなければ、あんな事にはならなかったのかもしれない。

床屋によって、自宅へ向かった。すっきりして、さあ、着替えるか、みちるの準備はできているのか、そう思つて、自宅へ。

だが、家の前の様子がおかしい。警察の車が何台も止まり、救急車も止まっていた。不吉な気持ちが頭をよぎった。自分の家の駐車場まで車では進めず、近くにいた警察官に

「あの家のものだが」

と、運転席から窓を開け、自宅を指さし、言いかけたその時だった。「秀雄さん、ああ、もう大変な事に。みちるちゃんかはねられて。」と、義母が走りながらやってきた。びっくりした私は車をそのまま

に、自宅の門のところまで来た時だった。

見覚えのある赤い軽自動車が、門を突っ切って玄関に突っ込んでいた。玄関の中はガラスが割れおびただしいほどの血が飛びきっていた。

「みちるは？」

「たった今、ゆきえが付き添って救急車で運ばれた。」

「けがは？」

「頭を打って意識がない。」

「病院は？」

「県立へ運ぶって。」

「いったいどうして…？」

そう言いかけて、その赤い軽自動車に目をやった。ナンバーをみて、状況をみて、私はすべてを悟った。

「智子か…。」

見ると警察の車の中で、智子が震えている。両脇を警察官に挟まれて事情を聞かれているようだった。あまりの事に腰が抜けた私に、

「秀雄さん、ゆきえから電話だ。」

義父が電話を取り次いだ。

「もしもし、ゆきえ？」

「あなた、みちるが、みちるが。」

「どうした、今すぐそっちへ行くから。」

「みちるが、亡くなりました…。」

「なんだって…。」

「私は何も望んではいませんから。」

そう言った智子だったが、店を出た私を車で追いかけたらしい。まっすぐ帰ったと思ったのだろう。「床屋に行け」、と言われた事を知らない智子は途中、私を追い越して、私の家の玄関にそのまま突っ込んだ。突っ込んで、私の帰りを待ちわびて、私の車で七五三

のお祝いにかけはるはずだった、小さなみちるを跳ね飛ばしたのだ。あつという間にみちるは、晴れ着のまま遠くへ逝ってしまった。

「みちる。久しぶりだったわね」

ゆきえは、雑司ヶ谷にある墓の前で、もう何時間もみちるに話しかけている。話しかけては、みちるからの返事を待っている。

「一緒にいこう、って、とうさんを誘った方が良かったかしらねえ。」

「うん。一緒によかった。」

「そう？ かあさんだけでいいじゃないか。とうさんは、かあさんのことなんてちつとも心配してくれないからねえ。」

「そうかな？」

「みちるだって、とうさんが嫌じゃないかい？」

「嫌なんじゃないよ」

「そうかい？ とうさんと一緒に嫌かと思って、みちるの部屋は二階にしたんだけどねえ。そんな必要はなかったのかねえ。」

「最初はねえ、一人ぼっちで寂しかったんだよ。」

「寂しかったのかい。それは悪かったね。」

「でも、大丈夫なの。」

「なんでだい？」

「……」

「おや、教えてくれないの？」

「… かあさん… あのね。」

「どうしたの？ みちる…。」

「みちるのところには毎晩お友達が来るんだよ。みきおくんっていうの。いっしょに毬投げするんだよ。」

「みきおくん？」

「そう、みきおくん。」

みきお君

その名を聞いて、ゆきえは震えが止まらなかった。

晴れ着のまま、その可愛らしさを自分には見せることなく、手の届かぬ所へ消えてしまったみちるの葬儀の日。朝からずっと小糠雨が降り続き、私の心の奥底にじつとりとした何とも云えぬ虚無な空間に私はいた。私は警察から何度も事情を聞かれた。そして、この日の朝、警察からの電話で、取り調べを受けていた智子が、クモ膜下出血で倒れた、と聞かされた。重体だった。まさか、私がこの葬儀を抜けて会いに行く訳はないのだ。

誰かがそんな事を思っているのではないかと、私の心はさざ波だった。誰かが、小声で話しながらこちらを見れば、私と智子の事を噂しているのだらうと、簡単に推測できた。廻りだけではない。こうして座っている親族の席の左から、後ろからも、痛いほどの視線が突き刺さる。逢瀬の代償が、好奇の目に晒されながらこの場に座っている事だしたら、私はとても平常心ではいられなかった。

そして、葬儀が終わった、ひとしきりの時間のあとで、私のところに義父がやって来て言ったのだった。

「落ち着くまで、ゆきえを連れてゆく。」
と。

私はその日から、この家に一人きりになった。

ここで一人で暮らすのは結婚前以来のことだ。なんやかやと慌ただし葬儀の後で、ぽっかりとあいてしまった心の闇に

「智子が死んだ」

と、知らせにやってきたのは、智子の老母だった。

まだ、みちるの四九日にもなっていない雨の日だった。やつれたようなその表情の中に、疲れ果てているのは、この母も同じだとたやすく理解することはできた。玄関先で構わないと智子の母は言ったのだが、あの事故で玄関脇には大工が入っており、立ち話も聞かれずてしまいそうで、家の中に招き入れたのだった。

母は決して私を責めなかった。責められることも覚悟のうえの事だったが、

「謝っても決して許されない事をしてしまった。」

そう言つて、小さな骨壺と七五三の笑顔の写真のみちるの前で震えながら号泣した。そうして、

「奥様は？」

と訊いたのだ。

「あれから、実家に帰っている。」

とだけ私が答えると、居ない事に安心したのか、老母は智子の事を話し始めた。

智子が、クモ膜下出血が原因で亡くなったのは、あの事件から四日後の事だった、という。あつと言う間に娘を失った老母は、今日、こつして頭を下げに来る事のためにすべてを処分したのだと云う。小さいながらも智子がやっていたあの店も、少し離れたところに持っていた、母娘2人の住まいだった古家も、全部処分してそこから借金を清算して、残った現金のすべてを、みちるの遺影の前に差し出した。

「そんな事をして、あなたはどうかやって生きてゆくのですか？」

と、私が問うと、

「智子の不始末を奥様は許さないでしょうから。」
そう言つた。

「智子との事は私の不始末ですから。ただ、こつして失うまで、この子 みちる の存在を忘れていたのかも知れません。今になつて、ぽかんと穴があいてしまったようです。」

私はそう言つて、思わず、

「すいません。」

と、小さく肩を落とす母に続けてわびた。

智子がみちるを奪つたが、智子にそうさせてしまったのは、私の思慮のなさに尽きる。そこまでわかつているのなら、なぜ智子と云う女に溺れたのだ、と世間は言うだろう。まさかこんなことになる

は、というのが私の本音だが、正直、飲み屋で働く女なら、まさかこんな真似はしないだろう。という思いがあつたことも否定できない。

老母は、みちるの遺影に線香を1本たてて、ふと言った。
「みちるちゃん、なぜみちるといふ名前なのでしょうね。」

ゆきえの妊娠が分かった時に、

「もしも女の子なら、私とおなじようにひらがなの名前にしてください。」

とゆきえが言っていたので、ひらがな3文字で何か良い名前が無いかと徹夜して決めたのだ、と答えた。私は、

『未散』

という名前に、決して散り果てる事のない美しさを願っていたのだが、結局のところ、幼きうちに、咲く事さえも知らずに散ってしまったのだ。と、心のうちの無念を告げた。そして、散らせてしまったのは、智子ではなく、自分なのだ、と悔恨の気持ちも吐きだした。決して智子ではないのだと、自分に言い聞かせるように、そして、老母が傷つくことのないように、言葉を選んだつもりだった。ずいぶんと長い沈黙が続いた後で、

「ところで、」

と、私は言った。老母はうなだれるようにしていた首をもたげた。

「ところで、智子は、どこに葬られているのでしょうか。」

老母は、

「なぜそんな事を聞くのか？」

と言ったような表情を浮かべた。

「一度、智子に詫びてきたいのです。どうか、場所をお教えください。」

私が頭をたれると、老母は言った。

「市内の行徳寺に。泣くなつたあの子の父と一緒にところに。3人（、）（一緒（、）なら寂しくはないでしょうから。」

「3人？」

「あの子…、智子、妊娠していました。」

「妊娠…。」

「ええ。多分、あなたの子なのでしょうね。何かきいていなかったのでしょうか」

「何も、何も聞いていませんでした。」

「気がつかなかった…というのですか。」

「すいません。」

私は続く言葉が無かった。謝りにきたという智子の母に私はこうして何度も頭を下げている。

あの日、「しばらく会わない方が」、と言った私に、涙をこぼしながら、「残酷なひと」と言った智子の言葉は、自らの腹の中の子供についての言葉だったのか。そうだ、あの時、その後の七五三のお祝いの事ばかりに気を取られ、自分は別れる気などなかったのに、前夜の義父の訪問から気ばかり焦って、智子に対して思いやりのかけらもないような言葉を発してしまっていたのだ。あの時、私の後を追うように車を走らせた智子は、

「あなたの子はみちるだけではないのよ。」

と、私に告げたかったのかもしれない。「何も望んではいませんか。」「と云った智子の心の中を想うだけで、私の心は裂けそうだった。

「きつと、みちるちゃんへの嫉妬だったのでしょうねえ」

「みちるへの嫉妬ですか？」

「ええ、おなかの子供に名前をつけていましてね。」

「名前ですか？」

「そう、名前。」

「まだ3カ月にもならないお腹の子に、名前をつけていたのですよ。」

「名前…。」

「ええ、女の子なら、みき。男の子なら、みきお。」

「……」

「『未生』と書くのだそうです。」

「『未生』」

私は、抑えきれずに泣いた。ただ涙があふれて。みちるの葬儀以来、押さえていた感情も全部はじめて泣いた。

私はみちるには、決して散らない命を思つてみちる 未散 と名付けた。その名を智子はずっと感じていたのだらうか。智子は私にさえその事を告げず、自分の子には、みきお（みき） 未生 と名付けていたとは。

未生は、生まれてくる事すら許されない、という意味だらう。あの日、「会いたい」そう言った智子は、その事を私に告げたかったに違いない。どうして、言ってくれなかったのか、と思う反面、自分にはどうする事も出来なかっただらう、という事実もある。結局のところ、智子に溺れた自分の責任なのだ。私は一度に大切なものを3人も失つて、そして、今こうして、大切にしなければならぬはずの人を2人、激しく傷つけているのだ。

「許してやってください。どうにも昇華できなかったんでしょ。本当に許してやって……。」

そこまで言つと、老母は言葉にはならなかった。だが、自分に向けられるその目には、

お前だらう そう、私を蔑むようなそんな冷たさを感じさせた。

その日、智子の母が帰ったあとで、ふと台所に目をやると、実家に戻っていたはずのゆきえが何事もなかったかのように必死で酢飯を切っていた。

「みちるの好きな鮭のお寿司を作つてやろうと思つて。」

ゆきえはそれだけ言つと、食べられるはずのないみちるのために、みちるの好物を一心に作っていた。そうして、それから、ゆきえは笑う事なく、私を許すこともなく、この家にいる。

ガラガラガラ…。

亡くなった両親の代からの家には不釣り合いにも思える、あの直した玄関の引き戸が鳴った。

雑司ヶ谷にあるみちるの墓にゆきえがでかけて、帰ってきたのは16時を回っていた、と思う。ゆきえは、着物の胸の袷あたりを右手で押さえて、上がった息を平常に戻そうとしていたようだった。階段から降りて、

「どうした？」

と訊くと、こちらにちらりと目をやって、土間にぺたりとしゃがみこんでしまった。

「おい、どうした？」

もう一度訊いた。ゆきえは答えることなく、だが、私を見る目は、あの時の老母にも似た、生気のない憎しみだけで生きているようなそんな瞳だった。

「あなた、明日行徳寺に行ってください。私も行きますから…。」

「行徳寺…。」

「ええ、行徳寺です。」

あの日、実家から帰ってみちるの好物を作っていたゆきえは、私と智子の母との話を聞いていたのだろう。何も感じず、考えず、ただひたすらにみちるだけを思っていると思っていたゆきえは、しゃんとしていたのだ。みちるだけを思っているようにすることで、ゆきえは心のバランスを保っていたのかもしれない。あの日から、いや、それよりも前、智子に溺れるようになったその時から、心を閉じていたのは私なのかもしれない。

そうして、ツルは空高く舞い上がり、3度、頭の上をくると大きく回って、

遠くに消えて行ってしまったのでした：おしまい

「みちる。こんなちいさな狭いところに押し込めてごめんなさいね。」

「おかあさん？」

「お母さんは、あなたもお父さんも幸せにしてあげられなかったわ。」

「？」

「みちる、あなたは遠くに行かなければいけないのよ。わかるかしら……。」

遺影のみちるは、無邪気に笑っていた。話しかけるゆきえの隣にこうして並んで座るのは、実は初めてだった。他人は私を責めるだろうか。だが、ここにこうして並ぶ事が、どれだけの拷問だったか、誰にもわかりはしないだろう。自分が巻いた種だと言ってしまえばそれまでだが、私の心は裂けてしまいそうだった。

「ゆきえ、何を考えているんだ……」

「明日は、一緒に行っていただきますよ。行徳寺に…。」
「行徳寺って、何をしようっていうんだ？」
「お参りに行くだけです。こうして並んで手を合わせる。ずっと避けてきた事です。行っていただきますよ。」と、ゆきえは云うと、
「みちるが待っているって言ってますから。」と加えた。
「誰が？誰が待っているっていうんだ…？」

みちるちゃん。みちるちゃん。
今夜はどうしてはよいの。
ふたりでこれから遊ぼうよ。
とうちゃん、かあちゃん、寝たからさ。
ふたりでこれから遊ぼうよ。
毬投げ、お手玉、おはじきに、めんこに、ビー玉、こま回し。
ふたりでこれから遊ぼうよ。

「みちるちゃん。」
「みきおくん。」
「教えちゃだめって言ったじゃないか。どうして？どうして話しちやっただい？」
「あんまり心配ばかりするんだもん。お友達がいるって教えたかったのよ。」
「もう、会えなくなっちゃうじゃないか。」
「どうして？」
「どうしてって…遠くに行かなくちゃいけないからだよ。」
「遠くって？」
「みちるちゃんも、行くんだよ、遠くへ。」
「みちるも…。いやだ、ここがいい。」
「さっき、おとうさんとおかあさんがここへ来ただろう。」
「うん、来たよ。」

「もう大丈夫。遠くに行つても、大丈夫。」

「いやだ、ここがいい。」

「もう、ここにはいられないんだ。おらもここへは来られない。」

「いやよ。」

「大丈夫。おとうさんとおかあさん、ずっと仲良しだから。」

「ちよつと待つて。みきおくん、どこへいくの？」

「さよなら、みちるちゃん」

「いやよ、待つて。待つてよ、置いていかないで。みきおくん。置いていかないで。みきおくん。いやよ、いやよ、いやあ。」

みちるの声が聞こえた。

私は思わず、掛けていた布団をはねのけて布団の上に腰かけるように座つた。隣でねているゆきえも目が覚めて、

「どうしたのですか？」

と、言つた。

「今、みちるの声が聞こえたんだ。」

「みちるの声？」

「ああ、みちるの声だ……」

私はそう言つて、カーディガンを羽織つてみちるの部屋に向かつた。ゆきえも着いてきた。たしかにみちるの声だった。「いやあ」と、悲しい叫びに聞こえた。

みちるの部屋の襖戸を開けた。開けたとたん、中からは冷えた空気がざあつと音をたててゆきえと立つていた廊下に流れ出た。ゆきえがパチンと電気をつけた。いつもの通りのみちるの遺影と仏壇しかない、ただそれだけの和室だった。

「夢だつたのかな。」

私がゆきえの顔を覗き込むと、ゆきえは、

「いえ、きつと、夢なんかではないのでしょう。私が、みちる、みちる、と言い過ぎたせいかも知れません。逝き場がないのですよ。」
「行き場？」

「ええ、もう逝かせてあげないと。」

ゆきえはそう言っと、仏壇の扉をそつと閉めたのだった。思えば、仏壇の扉を閉めたのは、みちるが逝って初めてのことだったのかもしれない。その夜、布団の中でゆきえは必死で涙をこらえているようだった。時折、嗚咽がもれていた。暗い闇は続いた。

朝、雀の泣き声で目が覚めた。春はまだ遠いというのに、ずいぶん
と朝が早くなつた気がする。東側の窓のカーテンの隙間から、うす
く明かりが洩れるようになってきた。台所の方から、味噌汁を煮る
においがしてきた。久しぶりの事だった。

「おはよう。」

私が台所に入つてゆくと、ちらりと視線をやつて、ゆきえはそう
言つた。そうして、

「すいませんが、2階の窓を開けてきてください。」

と言つたのだった。昨日までのゆきえならこうして朝飯の用意をす
る前に、自分でみちるの部屋に行つて窓を開けていただろう。どう
した心変わりかと思つたりもしたのだが、その声が明るくて私はた
めらうこともなく2階に行つた。

その部屋の引戸を開けると、この部屋の東側の窓からも薄く朝日
が差し込んでいて、カーテンを開けた瞬間に、ぱあっと何かが消え
失せたようだった。籠っていた何かがあつという間に朝の空気と入
れ替わつたのは、南側の窓を開けた時だった。昨日の夜、ゆきえは
この部屋を出るときに、仏壇の扉を閉めていた。小さなその扉を開
けると、そこにはみちるの位牌があつた。遺影に目を移せば、そこ
には柔らかな笑顔があつた。

「おとうさん、ありがとう」

笑顔の口元から、みちるの声が届いた気がした。

「そろそろ出かけましょうか。」

ゆきえがそう言つたのは10時を回つていたと思う。こうして、
肩を並べるように出かけるのは、何年振りだろう。この前がいつだ
つたか私には思い出せなかった。そんな、私の思いに気がついたの
か、

「病院へ行つた時以来ですね。」

と、ゆきえは言った。そうか、あれ以来か、と私はようやく気がついた。ゆきえから妊娠したかもしれない、と聞かされて一緒に病院に出向いた時だった。あれから、もう5年以上の時間が流れたのか…。

目の前に長い石段がある。行徳寺はこの上にあるのか、と、私は、ため息をもらしそうになったその時、ゆきえは、

「いきましょ」

そう言つと、途中で買い求めた白菊の花を抱え、歩み始めた。

「どうして、お寺の入口には石段があるか、あなたはご存知ですか。」

途中、山のようになつたその場所を登る私にゆきえが訊いた。

「いや…。」

私がそう言つと、ゆきえは話し始めた。

「門をくぐつて、こうして石段を登りながら、俗世に別れを告げるのだそうですよ。垢や埃を俗世においてゆくのだそうです。そしてきれいにならないと、寺には入れないそうです。」

「垢や埃…」

「ええ、垢や埃です。」

「……きみは私を責めているか。」

「今になってみて、ですが…」

「ん？」

「あなたの浮気を見て見ぬふりしました。」

「ああ。」

「私はそういうふう to 育てられましたから。」

そう言われてあの時を思い出した。

男の火遊びにいちいち口をはさむつもりはない
義父は私にそう言ったのだった。

「あの時、私があなたを責めていたら、この石段を登る事はなかったのかもしれませんが。だから、私もこの石段を歩かなくてはいけないのですよ。きつと、私にもたくさんものがついているのですよ。心の中で、あなたを責めていた時もありましたから。」

『心の中で、』、そう言われて、その通りだろう、と私は思った。責められる方がどれだけ気が楽だったろう。それをしなかったゆきえは、妻の鏡だったのだ。だが、その強さが、折れて朽ちてしまいう。そんな智子と離れられない関係を作り上げてしまったのだ。途中、私は、石段の上から下を振り返った。俗世はもう見えなかった。石段を登りきったそこには左右に数本の桜の樹が植えられ、寒々としたその枝ぶりの向こうに、本尊があった。その向こうにいくつもの墓石が並んでいた。どこだかわからぬ智子の墓をさがしている。と、ゆきえが、あれでしょう…と言った。

墓誌には、確かに智子と水子の名があった。手向けられた菊の花は枯れていた。老母が備えたのだろうか。持ってきた白菊を供えるときになって、

「あなた、お願いします。」

とゆきえは言って、「わたしになんかやって欲しくはないでしょうから。」と、続けた。

花を供え、水をやり、線香をともにして手を合わせる。私の横ではゆきえが同じように手を合わせていた。

「みちるがねえ、言うんですよ。毎晩、みきおくと遊んでいるって。」

「みきおくん…?」

「ええ、みきおくんですよ。この子…。」

そう言って墓誌に目をやった。

「……」

私はあの日、老母に教えられた子供の名前の事を思い出した。「やはり聞いていたのだね。」

「ええ。でも、あの頃は、聞いていたというだけで、まったく頭には入りませんでしたけど。」

「私もだ。」

「ここへ来たんです。少しは気持ちがラクになりませんか。」

「どうだろうか。お前は、私を許せるのか。」

「いった筈ですよ。私はこういつぶうに育てられたのだ、と。」

みちるちゃん。みちるちゃん。

今夜はどうしてはやいの。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

とうちゃん、かあちゃん、寝たからさ。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

毬投げ、お手玉、おはじきに、めんこに、ビー玉、こま回し。

ふたりでこれから遊ぼうよ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500t/>

未散未生 散らず、生まれず

2011年5月21日22時10分発行